戦時体制下における早稲田大学附属高等学院の教育に関する一考察 —特修科を中心に—

山本 剛

はじめに

本論文の目的は、戦時体制下における早稲田大学附属高等学院の教育内容を明らかにすることにある。

同大学附属高等学院では、1941(昭和16)年に新たな教科として特修科を設置し、戦時体制下における臨時措置のもとで憂慮された、いわゆる「学力低下」に対応したのであった。

筆者は、全体的な研究として、近代日本における大学予備教育の歴史的特質を青年期の教養教育という視点から検討し、大学教育の前提となる生徒にどのような意識の下で、大学予備教育を行っていたのか、その理念、制度構想および教育内容はどのようなものであったのかを究明することを課題として、大学予科の実態を究明する研究を構想している。

本論文は、このような全体的な研究構想の下で個別学校を事例として、大学予科の教育を考察する研究の一つに位置づくものである。

本論文に関する先行研究を確認すると、日中戦争から太平洋戦争へと拡大する戦争、すなわち1937(昭和12)年から1945(昭和20)年の敗戦前にいたる高等教育の制度・内容に関する研究は一定の蓄積があり¹、個別学校の沿革史においても主な叙述対象とされている。しかし、これらの研究は、戦時体制下の臨時措置による政策の動向に重点をおいたものが多く、個別学校の教育の実態は、その『沿革史』においても「ファッショ的再編成」として捉えられ²、制度編成の概略を知ることはできるが、実際の教育内容がどのようなものであったのかについては、未だ多くの研究課題を残しているといわざるを得ない。

さらに関連した研究として、国民学校、中等諸学校、師範学校、高等教育諸機関などの学校の諸段階および学校外の諸領域で、どのような理念のもとで教育実践が進められたのかを検討した『総力戦体制と教育—皇国民「錬成」の理念と実践—』があげられる³。本書は、戦時下教育のもとで、「錬成」という理念に注目し、学校の諸段階および学校外の諸領域で「錬成」がどのように受けとめられ、その実践がどのように進められたのかを実態に即して分析し、「錬成」理念の教育史上の位置づけについて考察をおこなった。

このうち高等教育諸学校の項目を執筆した寺崎昌男は、1935(昭和10)年の教学刷新評議会の審議と答申をはじめとして、1937(昭和12)年から43(昭和18)年までの高等学校、大学予科および専門学校に対する措置を中心として展開されてきた教育方法・内容・課程についての政策的な動きを「錬成」との関係で考察した。その際、錬成教育の実践を行った早稲田大学を取り上げて、同大学に1940(昭和15)年に設置された学徒錬成部を検討した。さらに、早稲田大学、日本大学、東京商科大学、慶応義塾大学の東京の4大学において、当時、錬成がどのように受けとめられ、実施されていたのかを語る座談会記録を検討して、①高等教育機関における錬成の実践は、形態、程度において多様であること、②「建学の

理念」への回帰ないしその読み直し、確認が行われていること、③「学問」と「錬成」との関係が絶えず問われ、その関係のつけ方について、一定の方向性はみえるものの、質的な一致点はなお模索されつつある、と分析している⁴。そして、大学には錬成組織の強化にともない学生の「学力低下」への強い危機感があることを指摘しつつ、高等教育諸機関における錬成の考え方は、「永年西欧科学、西欧思想に向かって開かれてきた『学問』の場としての本来的性格のゆえに、一方で国体主義の理念と私塾的教育形態への回帰をたえず要請されながら、他方で、『学ぶ』行為そのことが錬成であり、その行為に練達した者だけが、錬成を経た人材である、という近代的なエリート主義の教育理念とも結びつき、その両極の間を揺れていた」と結論づけている⁵。

このような指摘を踏まえ本研究では個別学校の教育の実態をさらに考察する意味から、大学予科である早稲田大学附属高等学院(以下、高等学院)を事例として、同学院が錬成組織の強化のなかで顕わになる「学力低下」問題に対して、どのような教育上の方策を講じたのかを明らかにすることを課題とする。

この課題を検討するうえで、既述したように1941(昭和16)年に高等学院の教科に設置された特修科の内容を考察する。

早稲田大学に関しては、上記の先行研究で、錬成教育の実践を行った同学院の学徒錬成部に重点が置かれ、大学には学力低下への危機感があったとの指摘をしつつも、それに対する具体的な方策に関して検討がなされていない⁶。

実際、戦時体制下の臨時措置のなかで高等学院では学徒錬成部と並んで特修科が設置された。この特修科の設置により同学院では戦時下の臨時措置にともなう生徒の「学力低下」に対応したものと考えられる。すなわち、大学予科の生徒に対して、「学問」をいかにして指導するかは、この特修科で担われていたのであった。したがって、同学院の教育を把握する際に、特修科の内容を検討することは欠くことはできない研究課題と言える。

特修科については、これまで同大学の沿革史である『早稲田大学百年史』でも僅かに記載がある程度でその詳細な叙述や歴史的な位置づけがなされておらず、未開拓な研究状況にある。本研究では、同大学が文部省に提出した認可申請書や早稲田大学大学史資料センター所蔵の関連諸資料から、その内容を検討する。以上の研究は、戦時体制下の臨時措置のもとで、個別大学の取り組みを事例として、その教育内容の一端を明らかにするとともに、教育史上における大学予科教育の内容を検討する際の試論的考察を試みるものである。

以下、本論文の構成としては、まず認可申請書に記された高等学院の学則改正理由を検討する。続いて、そこで設置された特修科の内容を検討する。その際、特修科で行われた教育を明らかにする。最後に、戦時体制下の臨時措置のもとで特修科はどのように捉えられていたのかを検討する。

1. 特修科の認可申請

日中戦争から太平洋戦争へと拡大する戦争のもとで高等教育の制度・内容にわたる再編成が行われた。この戦時体制下において教育制度の再編成がつぎつぎに進められたことは

教育史上広く知られていることであり、高等学校、大学予科の諸改革が、法令上の教育内容規程のもとにおかれていたことは指摘するまでもない。早稲田大学においても、当然ながら政策上の改正動向の中で、教育内容規程を改正していた。

特修科は、1940(昭和15)年12月16日付で学則改正の認可申請を行い、翌41(昭和16)年3月31日付で認可された。ここで高等学院(第一、第二)の学科課程に特修科という教科が新設された⁷。以下、文部省に提出された学則変更の認可申請書を検討する⁸。

同学院は、「現下ノ情勢ヲ鑑ミ身心共優秀ナル人材ヲ養成」する必要を認めて、教授内容の「有機的統一」を図る目的で学則改正を行った。

改正理由は次のように述べる。すなわち、「本大学ニ於テハ現下愈々ソノ切実性ヲ加ヘ来レル日本ノ世界的発展ノ使命ニ鑑ミ、身心共ニ優秀ナル指導的人材ヲ錬成スルノ必要ヲ再認識」して、高等学院の「教育内容ノ改善ヲ行ヒ、学科課程ノ改正ヲ為サントス」。

高等学院の教育内容を改善し、学科課程を改正することは身心共に優秀な指導的人材を「錬成」することであり、現在の時局のなかで緊要なものであるというのである。

なお、この時期は教学刷新評議会の審議と答申をうけて、1939(昭和14)年から翌40(昭和15)年にかけての教育審議会の答申前後から高等教育の再編成が行われた。この教学刷新の動向は、大学に対して強く向けられ、文部省が1940(昭和15)年12月に「大学教授ハ国体ノ本義ニ則リ教学一体ノ精神ニ徹シ学生ヲ薫化啓導シ指導的人材ヲ育成スベキ旨ノ訓令」を帝国大学総長、官公私立大学学長に発して、大学教員には「国体ノ本義ニ則リ教学一体ノ精神」に徹して、「教育者タルノ自覚ヲ振起シ師弟同行ノ間ニ学生ヲ薫化啓導シ学徳一体ノ修練ヲ積マシメテ負荷ノ大任ニ堪フベキ指導的人材ヲ育成スルニカムベシ」と説くなど、時局の展開のなかで、「フアッシュヨ的再編成」が大学にまでおよぼされてきたを詳説する必要はなかろう⁹。教育内容の改正は戦時体制下の臨時措置における規程のもとでなされたのであり、同学院の学則改正も国策の影響であった。

ただし、認可申請書の改正理由にも記されているように、戦時体制の強化にともなう臨時措置のなかでも、大学には伝統的な思惟である主知主義は否定されておらず身心ともに優秀な「指導的人材」の育成を期待されていることは確認しておく。

続いて、同申請書では、高等学院の教育内容の改善に関して、以下4項目を掲げた¹⁰。すなわち、教科について、①「国是即応、体力錬磨、集団訓練」の達成を目的とする「錬成科」を設置する。この錬成科で、「学校教練」を強化して、「体練、錬成、勤労作業等」の諸科目を課す(第一項)。次に②「自学自修、創造的精神涵養」の達成を目的とする「特修科」を設置する。この特修科で、「科学、語学、芸術、国防、武道、競技等」の諸科目を選択必修として課す(第二項)。そして、③「総合的見地」からこれまでの同学院の「教授内容」の「有機的統一」をはかり、「国民科、自然科学科、外国語科、錬成科、特修科ノ五大系」の教科に「編制」する(第三項)。

こうして①「錬成科」と②「特修科」という新たな教科を編成しながら、「文武両道」の各分野の「指導的有能者」の「錬成」を期するとされたのであった。ここで設置された諸科目は以下のように記載されている。

国民科 修身、哲学(論理、心理ヲ含ム)、国語、漢文、歴史、政治経済(法制、国防科学、地理、社会学ヲ含ム)

自然科学科 数学、図学、物理、化学、植物及動物、鉱物及地質、自然科学概論

外国語科 英語、独語、仏語、露語、支那語

錬成科 錬成(勤労作業ヲ含ム)、体練、教練

特修科 科学、語学、芸術、国防、武道、競技

このような科目を設置し、さらに④「組主任制度」を強化し、教員は、「教学一体ノ精神ニ基キ、学院長指導ノ許」で、「訓育指導」を行い、「学生トノ人格的接触並ニ家庭トノ連絡ヲ図」りながら、「学生ノ全生活ノ教導ニ当ラシム」(第四項)、とされたのであった。

ところで、繰り返すように、これらの教育内容の改正は戦時体制下の臨時措置における規程のもとでなされたのであり、同学院の学則改正も国策の影響であった。つまり、この教育内容の改正は、1939(昭和14)年の教育審議会の答申である「高等学校ニ関スル要綱」で示されている内容、すなわち教科内容の整理刷新や生活教育の重視、あるいは自発的研究の指導などの政策的な動きを受けたものであることは理解できる¹¹。

ただし、同学院では、後に検討するように「科学、語学、芸術、国防、武道、競技等」の諸科目を選択必修とする②の特修科を設置したことは注目する必要がある。

こうして1941(昭和16)年より同学院では特修科の授業が開始された¹²。同年4月付の「高等学院学則」をみると、その学科目編成には特修科が記載されており、学年ごとに毎週授業時間は4時間から6時間であることがわかる¹³。なお、もう一つの①錬成科に関しては、周知のように「高等学校ニ関スル要綱」における高等学校の教科のうちの体練科に相当するものであり、当然ながら同学院の学科目編成にも体練と教練が課されている¹⁴。さらに早稲田大学において、高等学院、専門部および高等師範部の生徒を対象として、同年41(昭和16)年から開始された学徒錬成部があった。この学徒錬成部に関しては、同申請書に特修科の内容とともに、その説明内容が記されており、同大学では「はじめに」で述べたように、錬成教育の実践として学徒錬成部を開始し、「錬成道場」で錬成教育を行った。この学徒錬成部に関しては、すでに先行研究で明らかにされているので、高等学院の生徒は道場で教育を受けたことを指摘するにとどめておく¹⁵。

以上のように、同学院では学徒錬成部と並んで特修科を設置したのである。それでは、特修科の内容はどのようなものであったのだろうか。次に、その組織編制や教育内容を検討する。

2. 特修科の内容

同申請書に記載された「特修科内容」は5項目で記載されている¹⁶。以下、その項目ごとに検討する。すなわち、特修科は、①従来の高等学院に設置されていた「学友会」を解散して設置され、「学生生徒」の「自治自発ノ精神ヲ涵養セシメ自発的研究並労作ヲ以テソ

ノ特色ト為」すこと。そのために生徒は、特修科の「科目」を「各自ノ天分、個性ニ基」づいて、「選択」すること(第一項)。特修科の科目の設定としては、②「同学院ノ教育上ノ見地」よりこれを行い、「正科ニ対シ充分ナル関連」を保ちながら、「学生生徒ヲシテ充分ナル自発的研究並ニソノ個性発揚ニカメ」ることができるように配慮する。そして、特修科は、「一週四時間ハ之ヲ選択必修」として、そのうち「二時間ハ必ず語学ヲ履修セシメ、他ハ随意選択トシ強制ト自由トヲ適当ニ配合」することで、「各自ノ自律性ヲ伸長シ自学自修ノ習性ヲ助成」することを期する。加えて、「幹事制ヲ採用シ教員指導ノ下ニ学生生徒ヲシテ教室、研究室、道場等ノ管理及各種行事並諸計画ニ当ラシム」(第二項)。また、③特修科で「学芸」に関する科目は「優秀ニシテ指導性アル教員ヲシテ之ヲ擔任」させて、「一組ノ人員ヲ三十名以内ニ制限」し「学生生徒ニ対スル接触ヲ密ナラシメ以テ薫育上ノ効果ヲ高」めるとともに、「其教授ニ際シテハ午前中ノ一般必修科ニ比シテ各自ノ天分発揚ニ努メシム」(第三項)。続いて、一方の④「体育」に関する科目は「特ニ指導ヲ嚴ニシ技術ノ練磨ト精神ノ鍛練ニ依リテ優秀ナル人格ノ錬成ヲ行ハシメントス、尚之ニ充ツル時間ハ午後ニ限り以テ学業ト体育トヲ両立セシメ従来ノ弊風ヲ一掃シ得ベシ」とされた。さらに、「体育」に関する科目は「凡テ本大学ニ特設セラレタル学徒練成部ノ統轄指導下ニ置」く(第四項)。最後に⑤特修科に関しては「成績ヲ考査シ学年試験成績判定ノ資料ニ共ス」(第五項)と、記載されている。

おおむね上記の要点として、特修科は、①従来の生徒組織である学友会を改組し新設されたこと、②各生徒の自発的研究を重視し、週4時間を選択必修科目として編成し、そのうち2時間は語学を履修すること、さらには③学芸に関する科目は指導力のある教員を担任させて少人数のクラス単位で行うこと、一方の④体育に関する科目は学徒練成部の統轄指導下に置くこと、⑤特修科の成績は学年試験の判定の資料とすることなどが確認できる。

再三述べるように、このように特修科が学友会を改組し新設されたのならば、そもそもそれは1940(昭和15)年から翌41年にかけて、各学校の校友会、学友会等の自治的生徒組織を報国隊、報告団、護国会等に改組改称することを余儀なくされた戦時体制下の臨時措置として捉えられるが¹⁷、高等学院の特修科では上記のように語学と学芸に関する科目を重視していたことは注目すべきである。それでは、特修科の科目は具体的にどのようなものであったのだろうか。「科学、語学、芸術、国防、武道、競技等」の諸科目が設置予定であったことはすでにふれた。同申請書によるとそれぞれの諸科目が班単位として設定され、その中で各教授内容が設定されていた。それは次のようである。

特修科設置予定の科目

一、学芸ニ関スルモノ

語学班 英、独、仏、支那、伊太利ノ各外国語研究、国文、漢文研究

科学班 哲学研究、政治経済研究、史学研究、自然科学研究、社会学研究等

芸術班 文学、美術、劇及音楽研究

二、体育ニ関スルモノ

国防班 射撃、馬術、銃剣術、自動車、滑空、航空機械化ノ諸部

武道班 剣道、柔道、弓道、空手ノ諸部

運動競技 体操、競走、水泳、蹴球、ラグビー、野球、庭球、ホッケー、端艇、送球等ノ諸部

このように①学芸に関するものとして、「語学、科学、芸術」、②体育に関するものとして「国防、武道、運動競技」が設置予定の科目であった。なお、この諸科目の考察は後に検討することにして、続けて認可申請書の内容を検討する。

同申請書には「特修科実施ニ関スル要綱」として、①「特修科要項」、②「特修科実施上ノ細目」、③「昭和十六年度特修科表」、④「特修科時間割(大綱)」が記載されている¹⁸。このうち、上記ですでに明らかになった内容と重複する部分もあるが、①「特修科要項」と設置予定の科目が記載されている③「昭和十六年度特修科表」を検討する。

3. 特修科要項

「特修科要項」は次の8項目で記載されていた。以下、その項目ごとに検討する。すなわち、特修科は、①「選択必修トシテ全テ之ヲ午後」に配置する(第一項)。②「一般必修学科ノ画一的公式的ナリト異リ、其教材、課題変化ニ富ミ、時ニ時代及時局ニ即応シテ之ヲ選定採用」する(第二項)。③「学年、組ヲ単位トスル平等主義ヲ排シ、特ニ学生ノ個性ヲ重視シ、課題ヲ基本トセル指導ニ依リテ天才ノ發揮伸長ニ機会」を与える。ただし、その「各種専門的研究ハ学部、大学院ニ於ケル専攻トハ異リ、ソレノ基礎訓練ニ重キヲ置ク」ものとする(第三項)。④「自学自習ヲ原則トシ、観念的学習ヲ排シテ能フ限り生キタル資料ニツイテ実習、労作セシメ、以テ学生ノ自発的能動的攻学態度」の育成を助長する(第四項)。⑤「教授ハ選ビタル課題ニツキ常ニ学生ト共ニ攻学研究スルノ立場ニ立チテ指導」し、「以テ教授自カラノ攻学心ヲ満足セシムル機会ヲ得ルト共ニ、学生ト教授トノ人格的接触ヲ一層密ニシ教学一体ノ実ヲ挙クルコトヲ主眼」とする(第五項)。⑥教員は「学生」が「特修科ノ何レカノ班ヲ選択セシムルニ当タリテハヨク之ヲ指導シ」、学生は、「且ツ一旦選択シタル上ハ任意ニ変更セシメズ、責任ヲ重シジ目的貫徹ニ邁進セシム」(第六項)。⑦体育に関する特修科は「学徒錬成部ノ指導監督下ニ置キ、人格優秀適材有能ナル指導者ニ担当セシメ、体力錬磨ニ則シテ特ニ人格錬成ニ重キヲ置ク」(第七項)。⑧毎学期に「其成績ヲ調査報告」することにする。ただし「其成績ハ一般必修科目ノソレト區別シ、直接総点数ニ加算セズ、学歴ニ登録シテ参考材料」とする(第八項)。

以上が特修科の内容であった。この内容のいくつかはすでにあげたものもあるが、おおむねその要点として、①選択必修科目として午後の時間に行い、②正課の学科目とは異なる教材、課題を採用し、③平等主義を廃して、生徒の「天才ノ發揮伸長」の機会を与え、④「自発的能動的攻学態度」を育成することを挙げている。さらに、⑤特修科を担当する教員の心得や⑥科目選択の履修上の注意点、⑦体育は学徒錬成部の指導監督下に置くこと、

または⑧成績判定等の様相も把握できる。

それでは、特修科はどのような教授内容であったのだろうか。特修科設置は、戦時体制下の臨時措置のもとにおかれていたこと再三述べた。この要綱の内容が「高等学校ニ関スル要綱」を受けたこともすでに指摘した。ここでは教学刷新の動きを受けた高等教育改革の政策史を詳細に述べる余裕はない。高等学校と大学予科が戦時体制下の教育改革を最も強く受けた高等教育部門であったことを指摘しておけば足りるであろう¹⁹。

言うまでもなく1941(昭和16)年以後、高等教育政策ならびに高等教育の実態は、急速に臨戦体制下の破滅的な様相を呈してくる²⁰。問題はこうした戦時体制のもとで教育改革を余儀なくされた大学が「学力」の維持に対してどのような対応を行ったのかという点にある。

次に、こうした状況のもとで、特修科の教授内容はどのようなものであったのかを検討する。

4. 特修科の教育

高等教育機関では、1941(昭和16)年公布の「大学学部等ノ在学年限又ハ修業年限ノ臨時短縮ニ関スル件」をはじめとして、43(昭和18)年には、高等学校令および大学令が改正され、高等学校と大学予科の修業年限は2ヶ年に短縮された。さらに勤労作業の浸透や報国団活動等の重視による教育上の影響を受けていたことは周知の通りである。早稲田大学では、1942(昭和17)年よりこれまで修業年限2年制の第二高等学院を3年制に改正する措置を講じた²¹。これに関する詳細な考察は別稿で分析することにするが、ここで3年制を採用する理由として「学力」の問題があげられていた。すなわち、一連の戦時体制下の臨時措置による政策のもとで、学力低下への強い危機感が顕わになっていたのである。

加えて、一連の錬成教育の実践のなかで、「錬成」と「学問」との関係が絶えず問われていたことは、「はじめに」の先行研究で寺崎が指摘した通りである。

早稲田大学の教授であり学徒錬成部主事であった今田竹千代は、同大学の学徒錬成部の内容を報告した座談会で、「智的方面」における「錬成」を以下のように述べている²²。

(早稲田大学)両学院は午前学科午後錬成といふ組織に改めたわけです。(中略—引用者)例へばドイツ語部で曾てチャンピオンとし活動してをつたやうな者は、やはりその自主的創造的活動の余地を与へまして、そこで午前は一応一定の定められた時間をやるのですが、ドイツ語ならドイツ語、支那語なら支那語に特に秀でた者には、午後には充分な時間を与へてこれをやらせる。それは智的方面における錬成だと思います。

このような今田の発言は、反主知主義的な生活統制を強いる戦時下の教育政策に対応して、「学問」という基本的な責務をもつ大学の意識を表していると考えられる²³。特修科では、語学や学芸を重視したことはすでにふれた。ここで錬成教育の実践を行うなかで、同学院が、智的方面に充分な学習の時間を与えることが「錬成」だと捉えていることは注目

できる。すなわち、高等学院では、学徒練成部の「錬成」に加えて、独自に特修科を設置することで、語学などの能力のある生徒には「天才ノ發揮伸長」の機会を与え、生徒の「自発的能動的攻学態度」を育成することで学力を維持する意図があったと言えよう。

それでは、特修科の諸科目ではどのような研究が行われたのだろうか。次の表は、「昭和十六年度第二高等学院特修科表」と明記された特修科の科目である²⁴。この特修科表には、班名、班区分、担任教授の氏名、研究項目、指定時間数が記載されている。そのうち班名と研究項目を摘記すると以下のものであった。なお、ここでは班名と研究項目のみを摘記した関係で、研究項目については重複する項目もあるが、それは各担当教員が別であることは確認しておきたい。

表 1941(昭和16)年度 第二高等学院特修科表

一、哲学及科学特修科	
班名	研究項目
①哲学特修班	民族心理研究、比較文化論、研究指導、社会倫理学、世界観研究、研究指導
②史学及社会学特修班	近世独逸思潮研究、日本精神ト日本文化、研究指導、世界現勢研究、支那最近世史、民族学研究、研究指導、世界史研究、世界地政治学、人文地理、社会学的研究法、社会調査実習指導
③政治経済特修班	計画経済研究、経済学研究、研究指導、国策及世界政治研究、世界産業地理研究、研究指導、国防国家論、世界政治研究、研究指導
④自然科学及技術特修班	世界主要各地自然環境ノ研究、(気候、地勢、生産物等)其他研究指導、生物学特殊研究、研究指導、地球物理学研究、海洋研究(国防、産業、交通)、産業技術研究、研究指導
⑤国防科学及技術特修班	国防科学研究(軍事学、戦史)、研究指導、国防科学研究(技術、資源、国土地理)、東亜及世界国土計画研究
二、語学及芸術特修科	
班名	研究項目及指導課題
①国語特修班	各代作品鑑賞(近世)、各代作品鑑賞(近古)、研究指導、各代作品鑑賞(軍記)、能研究、研究指導
②漢文特修班	各代作品鑑賞、詩作研究、支那文学研究、日支文化交渉研究、支那思想研究、中国近代文学批評
③英語特修班	音声学(国語及英語)、修辞学研究、作品鑑賞指導、時文研究、言語学、風物制度研究、文学史研究、小説、評論解説指導、会話、オレイション指導、会話、タイプライター実習、小説

	鑑賞指導、時文解説研究、エッセー解説指導、演劇鑑賞、エッセー研究、翻訳法指導(英文和訳、和文英訳)、会話、会話、タイプライター実習
④独逸語特修班	各代作品鑑賞指導、独文法特殊研究、会話、各代作品鑑賞指導、独文法特殊研究、会話、劇、詩朗読研究、独語中古文法研究、会話、各代作品鑑賞指導、各代作品鑑賞指導、会話
⑤仏蘭西語特修班	作品鑑賞指導、文法特殊研究、会話、作品鑑賞指導、作品鑑賞指導、会話
⑥露西亜語特修班	文法研究、作品鑑賞指導、会話、作品鑑賞指導、会話
⑦支那語特修班	文法研究、支那風物研究、会話、支那現代小説鑑賞、会話
⑧創作指導特修班	和歌、俳句研究、創作指導、小説、劇、シナリオ研究、創作指導
⑨劇研究特修班	朗読、演劇、映画等ノ研究及実習指導
⑩美術特修班	美術史、絵画、写真、舞台装置、建築美術、都市計画、実習
⑪音楽特修班	音楽史、音楽理論、作曲法、実習指導

この他にも、3「国防、武道、競技特修科」が設置された。すなわち、①「国防特修班」として、射撃班、馬術班、銃剣術班、自動車班、滑空班、航空班、戦車班、国防研究班、②「武道特修班」として、剣道班、柔道班、弓道班、空手班、③「運動競技特修班」として、体操班、競走班、水泳班、蹴球班、ラグビー班、野球班、庭球班、ホッケー班、端艇班、籠球班、送球班、鎧球班、角力班、拳闘班、レスリング班、卓球班、スキー班、山岳班が設置され、これらはいずれも学徒練成部の管轄下に置かれた。

以上のように、哲学及科学、語学及芸術、国防武道競技の3つの特修科に分けて、そのうちに班が設定されていた。そして、実際の同学院特修科の科目編成は、この申請書をもとにそれぞれの研究項目の設定と教員が配置されることとなった²⁵。

こうした特修科の研究項目は、たしかに「国防、武道、競技特修科」という「体躯」を「練磨」する科目が設置されているが²⁶、その一方で、語学などの科目が重視されていたことは注目する必要がある。

また、早稲田大学大学史資料センター所蔵の特修科関連資料では、『特修科関係書類(一) 第一早稲田高等学院』と『昭和十六年四月特修科関係書類(二) 第一早稲田高等学院』の2冊が所蔵されている²⁷。前者には「早稲田大学附属高等学院教育内容改善案」として、これまで本稿で考察した認可申請書と同様の書類が綴じられており、後者には、主に「特修科選択に関する注意」として、特修科を選択する際の注意事項が記された文書が綴じられている。この注意事項によると、特修科の選択のうえで、英文学専攻志望者には英文学史、建築専攻志望者には自在画を選択させるなど、生徒には学部の専攻志望に応じて、それぞれの科目を選択させていたことが窺える²⁸。すなわち、特修科は学部進学のための「基礎

訓練」でもあった。

さらに、この特修科では、その研究成果が「研究発表会」として公開された。試しに1941(昭和16年)11月29日付の『第一回研究発表会』の冊子をみると、班ごとの研究項目の発表内容の概略が窺える²⁹。紙幅の関係で詳細な内容の考察は別稿で検討するが、戦時下のもとで研究発表会が行われたことは注目できる。

ところで、上記の研究項目は第二高等学院に設置予定されたものであり、先の「特修科実施ニ関スル要綱」には「備考」として、第一高等学院もこの研究項目に準じて特修科が設置されると明記されている。同大学の1941(昭和16)年度の『学科配当表』によると、第一高等学院の特修科は、先の「特修科内容」で特修科設置予定の科目として記載された「1、語学特修班、2、文化特修班、3、科学特修班、4、芸術特修班、5、国防武道競技特修班」の5班が設置されていたことが窺える³⁰。

以上、高等学院ではこのような研究項目を設定して、研究指導がなされた。こうして設置されたものは、学科目の枠を超えて、「生徒の個性を重視しながら」能力のある者に学習の機会を与え、生徒に「学問」に触れさせる契機となったのである。それは、一方で、錬成組織の強化のなかで「学力低下」に対処する方策であり、学部進学のための「基礎訓練」であったと考えられる。特修科は、学力低下への危機感が顕わになるなかでの具体的な教育施策であったと言えよう。

おわりに

以上、本論文では、戦時体制下における早稲田大学附属高等学院の教育内容に着目し、1941(昭和16)年に設置された特修科の内容を考察した。

その際、戦時下の錬成組織の強化のなかで、同学院は「学力低下」への問題に対してどのような教育を行ったかを視点として、特修科を分析した。

特修科の内容に関しては、本文で考察した通りであるが、選択必修科目としての研究項目を設定して、教員の指導が行われていたことは注目できる。翌42(昭和17)年発行の『早稲田大学案内』には、特修科について同学院を志望する者のために以下の紹介をしている³¹。すなわち、「特修科研究指導項目を数えれば実にその数は百項目に垂んとしている。生徒をして研究項目及び指導教員を単位として、一単位乃至三単位を選ばしめ、選択した以上は必修で試験を課し、不合格の場合は落第せしめることになっている」。さらに、既述した第1回研究発表会に関しても、「全国にその前例を見ぬ特修科とはいかなるものかとの期待と好奇から早朝続々と父兄、学生の群が押し掛け、口演形式、朗読形式、対話形式の各発表と文化映画、劇映画等の映画形式、劇形式による古典劇、英語劇、独逸語劇、仏蘭西語劇、実演による武道(柔、剣、弓)、体操、空手等が午前八時より大隈講堂で夜八時迄繰展げられ」た。こうした研究成果の発表会が行われることは、その学術水準は高く、教育的効果もあったものと考えられる。

戦時体制下の臨時措置のもと修業年限の短縮、勤労働員の日常化、そして学校の兵営化が進行するなかで、同学院では特修科により学科目の枠をこえた研究項目を設定し、教員

が指導した。このことは学力不足が憂慮されるなかで、限られた学習時間で能力のある者は「学問」をするという理念であり、反主知主義的な生活統制を強いる施策に対抗した実践でもある。

今後の課題としては、実際の研究項目の詳細な分析を行うことである。そこで、具体的にはどのような研究が行われ、生徒はどのようにそれらを受容したのかを究明する必要がある。さらに、他大学予科の事例の研究を進めたい。

注

- 1 『日本近代教育百年史』第5巻(1974年、国立教育研究所)、「第7編第3章高等教育」第1節寺崎昌男執筆部分、第2節二見剛史執筆部分、第3節麻生誠執筆部分、第4節天野郁夫執筆部分を参照。
- 2 同前書『日本近代教育百年史』第5巻、寺崎昌男執筆部分、1223頁。
- 3 寺崎昌男編『総力戦体制と教育－皇国民「錬成」の理念と実践－』(1987年、東京大学出版会)。
- 4 同前書、寺崎昌男「高等教育諸学校」『総力戦体制と教育－皇国民「錬成」の理念と実践－』、87頁－188頁。
- 5 同前書、寺崎昌男「高等教育諸学校」、191－192頁。
- 6 同前書、寺崎は、東京商科大学教授杉本栄一の論をあげて、同大学のゼミナール制度中心の錬成教育論の底にあるのが学力低下への強い危機感であったと指摘している。191頁。
- 7 早稲田大学では、修業年限が、3年制の第一高等学院と2年制の第二高等学院が設置されていた。
- 8 「学則中変更認可ノ件」『早稲田大学学則中変更認可ノ件』昭和16年4月11日、国立公文書館所蔵。
- 9 前掲書『日本近代教育百年史』第5巻、寺崎昌男執筆部分、1223頁。
- 10 前掲「理由」『早稲田大学学則中変更認可ノ件』昭和16年04月11日、国立公文書館所蔵。
- 11 『資料 教育審議会(総説)』(1991年、野間教育研究所紀要34集)、「高等学校ニ関スル要綱」153頁－155頁を参照。
- 12 「校報」『早稲田学報』昭和16年5月号。16頁－17頁。
- 13 『昭和16年4月早稲田大学学則』早稲田大学大学史資料センター所蔵。
- 14 なお、教育審議会における高等学校に関する論議については、米田俊彦『教育審議会の研究 中等教育改革』(1994年、野間教育研究所紀要38集)を参照。
- 15 『早稲田大学百年史』第3巻、(早稲田大学大学史編集所、昭和62年)、早稲田大学『学徒錬成』(昭和18年、早稲田大学出版部)、今田竹千代『学徒錬成読本』(昭和17年、東京講演会出版部)に詳しい。
- 16 前掲「特修科内容」『早稲田大学学則中変更認可ノ件』昭和16年4月11日、国立公文書館所蔵。
- 17 前掲書『日本近代教育百年史』第5巻、寺崎昌男執筆部分、1221頁。
- 18 「特修科実施ニ関スル要綱」『早稲田大学学則中変更認可ノ件』昭和16年04月11日、国立公文書館所蔵。
- 19 前掲書『総力戦体制と教育－皇国民「錬成」の理念と実践－』、174頁。
- 20 前掲書『日本近代教育百年史』第5巻、寺崎昌男執筆部分、1210頁。
- 21 教務課『自昭和十五年度年報』早稲田大学大学史資料センター所蔵。

-
- 22 座談会「学徒錬成の精神」『知性』5月号所収、(1942年、河出書房)、55頁。前掲書『総力戦体制と教育—皇国民「錬成」の理念と実践—』、191頁を参照。
- 23 同前書、『総力戦体制と教育—皇国民「錬成」の理念と実践—』で、寺崎は、この今田の発言について、大学に、「有為ノ人材」「指導的人物」の育成を期待せざるをえない、という教育方針は、錬成教育体制のもとでは、むしろ鋭いエリート主義となってあらわれると指摘している。191頁。
- 24 前掲「昭和十六年度第二高等学院特修科表」『早稲田大学学則中変更認可ノ件』昭和16年4月11日、国立公文書館所蔵。
- 25 早稲田大学大学史資料センター所蔵の『学科配当表』では、1941(昭和16)年度、42(昭和17)年度、43(昭和18)年度の両学院特修科の編成が確認できる。
- 26 前掲書『資料 教育審議会(総説)』、「高等学校ニ関スル要綱」153頁—155頁を参照。
- 27 『特修科関係書類(一) 第一早稲田高等学院』『昭和十六年四月特修科関係書類(二) 第一早稲田高等学院』、早稲田大学大学史資料センター所蔵。
- 28 同前書『昭和十六年四月特修科関係書類(二) 第一早稲田高等学院』。なお、ここで記載されている特修科は第一高等学院のものであり、「1、語学特修班、2、文化特修班、3、科学特修班、4、芸術特修班、5、国防武道競技特修班」の5班である。
- 29 『第二早稲田高等学院特修科 第一回研究発表会』1941(昭和16年)11月29日付、早稲田大学大学史資料センター所蔵。なお、研究発表大会に関しては、現在、1942(昭和17)年第2回大会12月6日の第二早稲田高等学院特修科 第二回研究発表会』が確認できる。
- 30 『昭和16年度 学科配当表』、早稲田大学大学史資料センター所蔵。
- 31 「両学院特修教育」『早稲田大学案内』昭和17年度版、早稲田大学新聞社編、(丸善株式会社、奥付なし)、224頁—227頁。